



サマーセミナー 7/30

「子どものねがいと発達保障」

講師 白石恵理子先生



発達保障に視点を当てた教育の発祥の地である滋賀県でいよいよ**全国女性教職員学習交流集会** が開催されます。それに先駆け、発達保障について学習しようと、小・中・高等学校、支援学校から 52 名の先生が集い、会場はぎっしりと埋め尽くされました。その中で、前半は「夜明け前の子どもたち」のダイジェスト版を視聴し、その後、映画に出てきたシーンを踏まえながら白石先生よりお話を伺いました。普通学級にも支援を要する児童や生徒たちが多く在籍する現状の中で、子どもたちの姿をどうとらえたらよいか、そもそも子どもたちのねがいは・・・と教育の原点に戻って考えさせられることがたくさんありました。

そして最後に、学習交流会の全体会に向けて、岡田先生の指揮で「琵琶湖周航の歌」の合唱練習をしました。「大きな会場なのでしっかりと口をあけて」というアドバイスを受けました。今年はこの歌がつくられて 100 年ということで記念すべき年でもあります。皆さんで会場いっぱいに歌声を響かせましょう。

以下簡単ですが、白石先生のお話の内容を紹介します。

1 糸賀一雄さんの言葉から・・・かみしめて聞きました。

「重症児が普通児と同じ発達のみちを通るということ、どんなにわずかでもその質的転換期の間でゆたかさをつくるのだということ、治療や指導はそれへの働きかけであり、その評価が指導者の間に発達の共感をよび起こすものであり、それが源泉となって次の指導技術が生み出されてくるのだ。そしてそういう関係が、問題を特殊なものとするのではなく、社会の中につながりをつよめていく契機になるのだということ。そこからすべての人の発達保障の思想と基盤と方法が生まれてくるのだ。」

「この子らはどんなに重い障害をもっていても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも、立派な生産者であるということ、認

め合える社会を作ろうということである。『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが生まれながらに持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである」(『福祉の思想』NHKブックス 1968年)

2 映画『夜明け前の子どもたち』を通して

この映画は1967年4月～1968年6月に重症心身障害児施設「びわこ学園」での取り組みを撮られたものです。

寝たきりで何の反応も示さない子ども、多動でどこへ行ってしまいかわからないのでひもをつけられて行動範囲を制限されていた子ども、いつも紐やほうきを持って離さない子どもなどの対応で、現場の職員の方たちは大変さだけを感じておられました。

しかし、取り組みを通して、それぞれの子どもたちの行動が意味することを細かく観察していく中で、子どもたちが何を求めているのかがわかってきて、お互いが育ちあっていくことを確信していかれます。

同じ行動に見えてもそこに乗りかかっている子どもの思いをどう理解しているかによってその見え方(理解の仕方)には大きな違いが出てくることや子どもをどう見るかという指導者集団の育ちの大切さについて再確認しました。

3 子どもを見ていく時に大切にしていかなければいけないこと

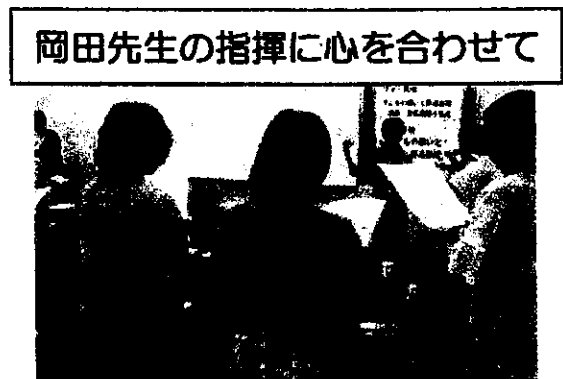
●「行動」「障害」と向き合うのではなく、障害のある子の人格と向き合うこと
障害や行動だけに目を奪われずに、その子がどのようなところで頑張ろうとしているのか、どのように外界を取り入れようとしているのかという視点をもって見ることによって子どもの理解が深まる。その時に、発達の視点でとらえることが大切である。

●子どもの「ねがい」に立ち返ること

「発達」をとらえるとは子どもの「ねがい」「希望」「要求」をとらえることであり、それらがあるからこそ、「不安」や「悩み」や葛藤が生じてくる。子どもたちの「ねがい」「価値観」と教師の「ねがい」「価値観」をすり合わせて新しい価値観を創造していくことが教育である。

●複数のまなざしの大切さ

問題を感じた時は一人で抱え込まないで、短時間でも子どものことを一緒に語り合い一貫性のある指導が必要。教師相互が思いを言い合える関係を作って「間」をもって子どもを見ることで子どもの本当の姿が見えてくる。



参加者の感想

たくさんいただきました。一部の掲載で申し訳ございません。

改定学習指導要領が求めてきている「生産者」を作るための教育と発達保障の考え方で見た「生産者」の違いがはっきりとしました。「自己実現こそが創造であり、生産である」という糸賀先生の言葉をたくさんの人と共有したいと思いました。

実際に支援学級を担任してから再度、今回のお話を聞いて具体的に思い浮かぶ子どもの事象があり、納得するところがありました。職員室で問題行動があった子のことを悩みながら話してくれる若い先生にアドバイスできそうです。

障がいの有無に関わらず共通に子どもの見方を学べるところが発達保障だと思いました。子どもの姿に含まれているたくさんのヒントを見出す力をつけることが教師の力量アップにつながるのではないかと思います。

中学校ですが、効率や成果が求められる社会で「言うことを聞かない子」や「頑張らない(頑張れない)子」はダメだとする考えがあります。この子たちも含めて子ども一人一人のねがいを受け止め、発達保障をしていくという思いはどの校種であっても共通したものだと改めて思いました。

1学期が終わって振り返りながら白石先生のお話を聞くことができました。映画も新しい見方ができたように思います。今年は20歳代半ばの先生と担任していて、若い先生のセンスは本当に刺激になります。その先生の良いところを自由に伸ばせるように一緒にやっていけたらと日々過ごしています。

「夜明け前の子どもたち」がつくられた今から50年くらい前に、重度の障害をもっていても発達の芽を先生方が見出しておられたことに励まされました。

「教育とは子ども教師の『ねがい』と『価値観』を燃り合わせて新しい価値を創造していくこと」というお話が印象に残りました。教師である「私のねがいや価値観は?」と問うた時に常に揺れている気がします。だから学ばねばならないのだと感じました。

映画の中に「できないことをできるようにさせようとする」という言葉に、1学期の自分の姿を重ねて聞きました。「本人のおもい」という大事な視点が抜け落ちていて、子どもにしんどい思いをさせていたのではないかと……。1学期は自分の困り感を出せる職場の雰囲気ではなかったのですが、これからは意識してお互いに出し合って一面的な見方にならないようにしていこうと思いました。